

SRDの存在が必要不可欠なものであることがうかがえる。

聞いた話では、現地ではSRD コンコウキョウセンターは人々の評判がいいそうだ。それには、子供たちが持って生まれた才能を発揮することや何か新たな技術を身に着けることを可能にするための奨学金や保育といった支援を手厚く行い、実際に多くの子供たちの将来の選択肢を広げてきたがためなのだなということが感じられた。

私はこのツアーを通して、私は日本に生まれた時点ですでに十分すぎるほど恵まれているのだという思いを抱いた。ただ、日本に比べ、相対的にフィリピンの生活の質が劣っているからと言って彼らが全くの不幸せであるというわけではない。彼らの幸せは私たちの幸せとは違う。そして、どちらの幸せがより優れているかなど図ることはできない。しかし、それでも彼らの感じている幸せよりも豊かな状況というのは必ず存在する。幸福の差異が次第に小さくなっていき、できる限り近い将来、ハズレのない世の中になってほしい。

●塚本 浩人さん (愛媛・今治)

2日目には、「KSEM ガールズホーム」を訪問した。ここでは施設が設立された経緯やシステムについて説明を受けた。車内で「虐待を受けた子どもたちの施設へ向かう」と聞いたときは、暗い雰囲気のある場所を想像していたが、実際に中に入ると、子どもたちは明るく元気に迎えてくれた。そのギャップにまず驚かされた。そして、歓迎のダンスを笑顔で披露してくれた姿を見て、とても感慨深かった。このような施設があり、メンタルケアを行ってくれるからこ



▲保育所のスタッフと

そ、彼女たちは引きこもることなく社会に戻ることができるのだと感じた。

2日目は、漁師町ナボタスにある KPACIO プログラムの視察や、SRD コンコウキョウセンターの訪問、さらにそのセンターが支援する子どもたちの家庭訪問を行った。どの場所でも、出会う人すべてが明るく、私たちが温かく迎え入れてくれたことがとても印象的だった。子どもたちは初対面にもかかわらず積極的に関わってくれて、心からうれしく感じた。現地の人々が私たちを受け入れてくれたのは、センターの活動に長い歴史と信頼があるからだと思う。これまでその信頼を築いてこられた方々に、改めて感謝の気持ちを抱いた。

海外に金光教の教会があることは知っていたが、このような施設を立ち上げ、何十年にもわたって現地で活動を続けていることは知らなかった。このような取り組みがあるからこそ、現地の人々が深い信頼を寄せているのだと実感した。今回の経験を通して、信仰を基盤とした支援活動の大切さを改めて学ぶことができた。

※一食をささげるチャリティー献金へのご協力を※

いつもご協力いただき誠にありがとうございます。近年、一食をささげるチャリティー献金は、非常に厳しい収納状況が続いております。子どもたちの教育の機会と安全な生活が守られるよう、いっそうのご協力をよろしくお願いいたします。

【郵便振替】 口座記号番号 01280-9-10799 加入者名 特定非営利活動法人 金光教平和活動センター

※SRD 教育里親の募集※

KPAC では、SRD コンコウキョウセンターで実施している教育里親制度の新たな里親様を随時募集しております。10年間1万円の支援金で、複数の里親様で1人の奨学生の教育資金の一部を補助しています。ご興味のある方は事務局までお気軽にお問い合わせください。

フィリピンスタディツアー報告

2025年9月6日～10日の5日間の日程で、フィリピン・スタディツアーを開催しました。参加者6名、スタッフ1名の計7名。参加者の感想文(一部抜粋)とその時の写真を掲載します。

▼SRDコンコウキョウセンターにて



●岩本 真礼さん (大阪・金岡)

ありがたいとは「有ることが難しい」、まさにそのことを実感することができたツアーでした。

2日目に家庭の事情で自宅で過ごせない子供たちがいる施設を訪問しました。行く前は、子供たちが心を閉ざしてしまっていて上手くコミュニケーションがとれなかったらどうしよう、どんな言葉をかけ

てあげたらいいのだろうと不安でしたが、触れ合ってみると、明るく元気いっぱいの人懐っこい姿に、逆に私が元気をもらいました。困難な状況の中でも前向きに生きる子供達の姿に心打たれ、自分自身も見習いたいと強く感じました。

住む家があり、家族と過ごすことができ、学校にも通える。そうした日常の一つ一つが決して当たり前ではなくとても恵まれていることだこのツアーを通じて痛感しました。日本ではできない貴重な経験をさせていただき、実際に現地を訪れたからこそ得られた学びや気づきがたくさんありました。また機会があれば、ぜひ参加させていただきたいです。

●藤島 莉緒さん (大阪・九条)

ガールズホームでは7歳から17歳の女の子たちに出会いました。ダンスを披露してもらい、私たちも一緒に踊り、楽しい時間を過ごしました。彼女た



▲子どもたちに折り紙を教える様子

ちはDVなどを受けてガールズホームに来ているということを知りました。そんな苦しい中でも一緒に写真を撮ろうと声をかけてくれる子、また来てねと抱きしめてくれる子、ハイタッチをしてくれる子、フィリピンのみなさんの心の温かさに触れることができました。

SRD コンコウキョウセンターでは、日本の伝統である折り紙をしました。小さい子でも作れるものは何かと考え、じゃばら折りでする簡単なリボンを作ると、女の子たちはみんな頭につけて喜んでくれました。男の子は蛙を作って私のところまで見せに来てくれました。かわいらしくて自然と笑顔になりました。

このツアーを通して、自分の知らなかったフィリピンを知り、学び、私には何ができるか、何をしてあげられるのか、などたくさんの学びを得ることができました。この学びを大切に自分自身も成長できたらと思っています。

●金光 紀子 さん (岡山・本部)

初めて訪れたマニラは、中心部は高層ビルが林立して大都会の様相を見せる一方、庶民の生活圏に入ると、道路を激しく行き交う乗り合いバスや2～3人乗りのバイク、数10本が束になってたわんでいる電線、道端で寝そべったりカードゲームをしたり物売りをしたりする人々、うろつく野良犬や野良猫、道端に積もるゴミ・・・と、カオスという言葉がぴったりの町だった。旺盛なエネルギーとやりようのない虚無感が同居しているような、不思議な空気が漂っていた。

ツアーで訪れた施設の子供達は、あどけない笑顔を見せながら将来の夢を語ったり、華麗なダンスを披露してくれたりした。貧困や虐待など辛い過去を背負っているという事前の説明を俄かに信じがたいような子供達の明るい様子に(時にふと寂しげな表情を見せる子も中にはいたものの)子供達のたくましさと、ここまで子供達を支えてきた方々の尊いお働きを感じずにはいられなかった。それでも、貧困層の多さや職の少なさ、労働者が搾取される構造など、多くの問題が幾重にも絡まり合っているこの国の現状を知るにつけ、この子達が明るい未来を切り開いていくには、新しい仕事を生み出したり、国の構造を変えていけるほどの人材を育てるこ

とが不可欠なのだということを痛感した。

SRD コンコウキョウセンターで学ぶ子どもの家を訪問させて頂いた時、スラム街に建つ5坪あるかないかの超狭小住宅で7人の子どもを育てたというお母さんは「子どもの教育を最優先している」と語り、夫婦の寝室を兼ねているという3畳ほどのリビングにはセンターの卒業生で大学の帽子とマントを身につけた息子さんの写真が誇らしげに飾られていた。KPACの活動がこの国の未来の一角を支えていることを目の当たりにして嬉しかった。

フィリピンの過去、現在、未来に思いを巡らせながら旅したこのツアーで学んだこと、考えさせられたことは数知れない。お世話になった全ての方に感謝しつつ、これからもこの旅のさまざまな場面を思い起こし、祈りながら、自分にできることを考えていきたい。



▲教育里親として支援する奨学生とその家族と

●内野 礼 さん (岡山・足守)

私は皆さんより1ヶ月早くフィリピンに入国してセブで語学学校に行き英語を勉強していました。その時はフィリピンという国に対してただ「貧しい国」というイメージしかありませんでした。セブでも所謂ストリートチルドレンと言われる子供達が通行人にお金を求める光景を何度も見ました。スラム街と言われる場所に行った時も、日本では見ることができない光景で驚くことばかりでした。

マニラに移動し、皆さんと合流して見学したり話を聞いたりするうちに、ただ「貧しい国」という認識が少しずつ変わっていきました。児童施設に伺った際に、人身売買や性被害にあった子供(特に女の子)が多くいて、精神的にも身体的にも被害を受けた子供達、教育をまともに受けられない子供達が施設に入ると聞きました。ストリートチルドレンのように表立って目に見える問題ばかりに注目が行きがちで



▲保育所での授業見学

すが、そのような問題もあることを知り、ただ貧しいという言葉だけで片付けていいものではないと気付きました。

別の日に現地の方の家にお邪魔した際、違法な場所に家を作り盗電して生活している人たちが少なからずいるということを知りました。本来、違法に家を建てることはダメなことですが、フィリピンという国が抱える問題がとて多く、そこまで規制することができていないのかなとも思いました。しかし違法行為をしている方達も生きるため、家族や子供と暮らすために仕方なくやっており、本来国が守るべき存在であるということも同時に気付かされました。

最終日にマニラ大聖堂や隣の公園に行った際、フィリピンの歴史についてたくさん聞きました。フィリピンは長い間植民地として複数の国から支配されてきて、強制的にたくさんのかんことをやらされてきました。そのような過去からも今のフィリピンの姿を作る要素があり、単に今を見るだけでは原因は分からないと思いました。

まだ私もフィリピンについて知らないことばかりですが、問題ばかりでなく良い面もたくさんあります。国民の多くの方がとても明るくて気さくで、面白い人ばかりです。ご飯も美味しく島国ということもあり海もとても綺麗です。そんな素晴らしい国に私ができることは何もないかもしれませんが、現状を色んな人に伝えることぐらいはできるのかなと思います。

【正会員の方の広告紹介】

正会員で事業をされている方々を紹介させていただきます。広告掲載希望の方は正会員へご加入の上、事務局までお申し出ください。

医療法人 沖胃腸科クリニック

医学博士 沖 眞

広島市中区上八丁堀8-26 メーブル八丁堀2F
〒730 電話 (082)223-0303
-0012 FAX (082)221-5292

●杉本 祐さん (岡山・足守)

ガールズホームを見学した時にも、KSEM本部を見学した時にも感じたことだが、子供たちがとてもよく笑っていた。彼らは、個々人に差はあれど過去に家庭環境でつらい思いをしてきた子たちである。家庭環境というのは幼少期の人格形成に最も大きく作用するものであり、学校での他生徒との衝突などは比べ物にならないくらいに心に深い傷を残すと思われる。しかし、彼らはそんなことなかったかのように満面の笑みを見せてくれた。それは、おそらく私が日本で目にする子供たちの笑顔よりも良いものであったように思う。施設のサポーターの方々が存在や生活が彼らにとってそれだけ良いものであったのだろう。

また、彼らは自己紹介の中で自身の将来の夢について語ってくれた。その中で多く耳にしたのは、医者や警察になりたいという言葉だった。日本であれば、これらの回答よりもお花屋さんやパン屋さん、YouTuberなどの回答が上位を占めるだろう。この差異は生活環境の差に依存するのだと思う。病気になるばすぐに病院へ行き診察を受け薬をもらい、何か事件があってもすぐに警察が解決し、安全に毎日ご飯を親が作ってくれる日本、一方でそれとは対照的な生活を強いられる生活。そのような環境の中で人々を救う職業にあこがれを抱くのは当たり前なのかもしれない。

そのあと奨学生の家を訪問した。とても小さく座って足を伸ばせるかどうかという広さの部屋と調理に十分とは思えないサイズのキッチンが1階にあり、2階部分は見られていないので様子はわからないが広さは1階のスペースを合算したものであった。扇風機が回っているとはいえ蒸し暑かった。そこに両親と子供が5人暮らしていた。生活に十分な環境とは言い難いが、子供のうちの一人はとても成績がよく、現在大学で勉強しているそうだ。おそらくSRDの奨学制度がなければその才能が今のよう

に発揮されることもなかったのだろうと考えると、

皆様の健康と長寿を目指して

糖尿病・内分泌疾患専門

医療法人

江草玄士クリニック

医学博士 江草玄士

〒730 広島市中区八丁堀12番4号 八丁堀わかばビル2・3F
-0013 TEL 082-511-2666 FAX 082-511-2665
E-mail egusa@festa.ocn.ne.jp